

ヴェルディ：歌劇「オテロ」全 4 幕

台本：アッリーゴ・ボーイト(シェイクスピアの悲劇に基づく)

指揮：アントニオ・パッパーノ

演出：キース・ウォーナー

コヴェント・ガーデン王立歌劇場管弦楽団及び合唱団

オテロ(ムーア人でヴェネツィア共和国の将軍)：ヨナス・カウフマン(テノール)

イアーゴ(オテロの旗手)：マルコ・ヴラトーニャ(バリトン)

デズデモナ(オテロの妻)：マリア・アグレスタ(ソプラノ)

カッシオ(オテロの副官)：フレデリック・アントゥーン(テノール)

エミーリア(イアーゴの妻でデズデモナの侍女)：カイ・リューテル(メゾソプラノ)

ロデリーゴ(ヴェネツィアの紳士)：トーマス・アトキンス(テノール)

モンターノ(キプロス島の前総督)：サイモン・シバンプ(バス)

ロドヴィーコ(ヴェネツィア共和国の大使)：イン・スン・シム(バス) 他

使用ビデオ ブルーレイディスク SONY SIXC 28 日本語字幕付き



オテロ



エミーリアとデズデモナ



カッシオ、モンターノ、イアーゴ
ロデリーゴ

あらすじ

第 1 幕

15 世紀末、ヴェネツィア統治下のキプロス島。嵐のなかの海戦でヴェネツィア艦隊はトルコ艦隊を撃破し、将軍オテロが民衆の歓呼に迎えられて上陸する。戦勝祝賀の酒盛りがはじまると、旗手イアーゴが副官カッシオに深酒させて大きな騒動を起こさせる。オテロがやってきて激怒してカッシオを罷免する。オテロは愛妻デズデモナと愛の二重唱を歌う。

第 2 幕

イアーゴは落胆するカッシオに、デズデモナに地位回復のとりなしを頼むように勧め、自分の悪党ぶりを高らかに歌う。彼はカッシオと語らうデズデモナの姿を遠く

からオテロに見せて、たくみに不貞をほのめかす。そこへ妻がカッシオの赦免を願うので、オテロは疑惑から平常心を失い、夫の額の汗を優しくぬぐおうとする妻のハンカチを払い落とす。イアーゴはそのハンカチを手に入れ、そしてカッシオが寝言にデズデモナの名を呟いていたとオテロにささやき、さらに彼女のハンカチも持っていたと証言する。妻の不貞を確信したオテロは、イアーゴとともに復讐を誓う。

第3幕

ヴェネツィアからの使節の到着を待つ中、イアーゴはオテロに、デズデモナの不倫の証拠をみせると約束する。デズデモナがやって来て、カッシオの赦免をまた願うとオテロは怒り狂い、デズデモナの不実を責め追い出す。イアーゴがさらに証拠をみせると言い、オテロに隠れているように言い、やってきたカッシオに恋人ビアンカについて話をさせる。よく聞き取れないオテロはデズデモナについて話しているものと思い込む。

人々がヴェネツィアからの一行を迎える中、オテロがヴェネツィア総督からの書簡を読み、そこにはオテロがヴェネツィアに帰任すること、後任にカッシオが任命することが書かれていた。突然怒りだしたオテロにイアーゴが今夜に復讐を決行するよう話し、カッシオは自分で始末するという。オテロは人々に立ち去るように命じ、デズデモナを面罵し、錯乱して倒れる。イアーゴはオテロを指差して勝ち誇る。

第4幕

デズデモナは不安げに「柳の歌」を歌い、死を予感しながら祈りを捧げて眠りにつく。オテロはデズデモナに不貞を告白しろと迫るがデズデモナは潔白を訴え、オテロにより絞殺される。侍女エミーリアがカッシオがロデリーゴを殺したことを報告にきたが、瀕死のデズデモナをみて叫び声をあげる。人々がやってきてイアーゴの策略を暴露するとオテロはすべてを悟る。オテロは自責の念に駆られ短剣で自らを刺す。死の間際デズデモナの亡骸に最後の口づけを求めるが、叶わず息絶える。

初演まで

50歳を超えて「ドン・カルロス」(1867年初演)、「アイーダ」(1871年初演)を完成させたヴェルディは、詩人マンゾーニを追悼する「レクイエム」(1874年初演)を書いた後しばらく作曲から遠ざかって農園管理などに時間を費やしていた。一方周囲の友人からしきりに新作を勧められ、1879年には出版社リコルディから「オテロ」作曲を提案されその後ボートによる台本が届けられた。ヴェルディは作曲には慎重であり、また旧作の改訂作業もあり「オテロ」の作曲は進展せず、結局ヴェルディが「オテロが完全に完成しました！」と手紙に書いたのは1886年11月1日、台本の初稿を見てから7年、作曲に取りかかってから5年の歳月がたった。ヴェルディは73歳になっていた。初演は翌年2月ミラノ・スカラ座で、ヴェルディの指導、監督のもとで圧倒的な成功をおさめた。

「オテロ」の意義

「アイダ」によってヴェルディは過去を集大成したが、残された仕事は未知の世界に足を踏み入れることだった。ヴェルディはシェイクスピアに導かれ、ボーイトの協力を得て、「アイダ」から16年の沈黙ののちに、この勇敢な仕事を成し遂げた。「オテロ」ではオペラの伝統的な形式—レチタティーボ、アリア、重唱といった区分も名称も存在せず、楽曲に番号も付いていない。音楽は一つの幕の間途切れることなく、ドラマと共に進行していく。また力強い朗唱(劇的な台詞)が、しばしば過去になかったような著しい表現力を示している。さらにオーケストラは飛躍的に進化し、情景や心理を雄弁に描写するようになった。このような意味で「オテロ」は過去と決別したオペラ、ヴェルディの革新的なオペラということができる。(小畑恒夫著「ヴェルディ」)

オテロ役について

「ヴェルディのオテロは本当にタフな役柄です。歌い手としてはこの役を多く演じることは危険です。彼の心理状態は、劇中ほとんど「うっと唸るようなまま」なのです。すなわち、怒りや攻撃性がずっと付きまとっている、きついテンション抜きで歌える場面が一か所くらいしかなく、喉がリラックスできない。また最後には妻を殺し、自分も刺してしまう、これが体力と心の消耗を激しくする。」(ヨナス・カウフマン)

文学者から

あらゆる作曲家のなかでシェイクスピアに一番近いのはヴェルディである。かれが「オテロ」と「ファルスタッフ」を作曲するのを、最晩年まで待っていたのは、われわれにとって何と幸運なことだったろう。「オセロ」はシェイクスピアの劇のうちで、もっともイタリア風の作品であるが、ヴェルディはこのドラマの独特の雰囲気と激しさを、音楽的手段によって伝えることができた。ヴェルディの「オテロ」は、ボーイトの手になるすぐれたリブレットという恩恵をこうむっていて、その音楽は、その一場面一場面がまさしく原作の詩を捉えているように思われる。シェイクスピアの作品につけられた音楽として、これ以上に忠実で効果的なものを、わたしは思い浮かべることができない。(ドナルド・キーン著「音盤風姿花伝」)

今回の鑑賞のポイント

- ① オテロがいかに破滅に向かっていくか。
- ② ボーイトの台本がオテロとイアーゴ、デズデモナとの間をどう描いているか。
- ③ 演出家がどのようにオテロ他登場人物の内面を描こうとしているか。
- ④ 指揮者がいかにドラマの進行に寄り添っているか。

(作成 塚田)